

「～ノニ」と「～テモ」の相違点について

安 善柱

キーワード：「～ノニ」、 「～テモ」、 逆接確定条件、 順接仮定条件、 接逆仮定条件

1 はじめに

「～ノニ」と「～テモ」は、前件と後件の因果関係が想定通りに成り立たず、前件と後件がともに既知の事柄からなる、逆接確定条件に用いられる言語形式である。ここで、既知とは、発話時点で話者がすでに知っている事柄のことである。ところで、「～テモ」は、逆接確定条件以外に、因果関係が想定通りに成り立ち、前件と後件がともに未知の事柄からなる順接仮定条件と、因果関係が想定通りに成り立たず、前件と後件がともに未知の事柄からなる逆接仮定条件にも用いられる。ここで、未知とは、発話時点で話者がまだ知らない事柄のことである。ただし、同じ未知の構成要素を持つ「～テモ」を、順接仮定条件と見るかそれとも逆接仮定条件と見るかは、解釈の問題である。例えば、「雨が降っても、でかける」を、「（お天気であれば、でかける）雨が降っても、でかける」と解釈すると順接仮定条件に、「（雨が降れば、でかけない）雨が降っても、でかける」と解釈すると逆接仮定条件になる。

以下、逆接確定条件「～ノニ」と、順接仮定条件や逆接仮定条件「～テモ」との間の相違に触れる先行研究を踏まえ、本研究では、逆接確定条件同士の「～ノニ」と「～テモ」の相違を明らかにすることを目的とする。

2 逆接確定条件「～ノニ」と順接仮定条件「～テモ」

鈴木(1978;249-250)は、次の(1)の「～ノニ」と(2)の「～テモ」に対し、

- (1) 雪は夜になったのにやみませんでした。
- (2) 雪は夜になってもやみませんでした。

(1)は、「雪が夜になれば、とうぜんやむ」といった期待がもたれての発言であるが、それにもかかわらず「まだ降っている」といった意外・不満といったものがこめられている。……(2)は、「夜になる」ということと「雪がやむ」ということとの間には対比・照応といった関係はなく、「夜になる」は「雪がやまない」に対して、状況的・例示的な意味あいしかもっていない。

のように述べている。特に、(2)の「～テモ」の特徴は、仮定条件の場合にも同じであるとしている。ところで、「～テモ」の前件が後件に対して「状況的・例示的」であるとは、「～テモ」の前件は後件の成立のための一例であるということである。つまり、「夜になる」をp、「雪がやまない」をqとし、qの一例として、例えば、「夜が明ける」をsとすると、(2)の「～テモ」は、「pナラバ(sナラバ)q」の「～ナラバ」が「～テモ」に変わった「pテモ(sテモ)q」パターンとなるわけであり、この「～テモ」は順接仮定条件にほかならない。しかし、実際、(2)の「～テモ」は、前件と後件がともに既知の事柄であって、鈴木(1978)も言っているように、確定条件である。このことから、鈴木(1978)は、逆接確定条件「～テモ」の例に対して、順接仮定条件の説明をしているように思われる。逆接確定条件同士としての、(1)の「～ノニ」と(2)の「～テモ」の相違については、4節で考察を行なうことにする。

言語学研究会・構文論グループ(1986;50-51)は、事実的な、うらめ原因的な関係が「するの」に「しても」の両方によって表現されるとしながらも、両方のうらめ原因的な関係の成立の過程はまるっきり反対だとしている。まず、「～ノニ」については、

つきそい文の述語が「するの」のかたちをとるばあいでは、はなし手の意識のなかに前提としての《条件的な判断》が存在していて、はなし手はこの判断にたらしあわせながら、ふたつの出来事のあいだのうらめ原因的な関係を確認している。……はなし手の論理にしたがえば、当然おこるべき出来事がおこらなかったのだから、そこにははなし手のがわからの《あてはずれの感情》がつきまとう。

と述べている。一方、「～テモ」については、

つきそい文が「しても」のかたちを述語にするばあいでは、……はなし手がみずからの条件的な判断にてらして、ふたつの出来事のあいだの関係をとりむすんではない……。……/あたらしい、べつの状況があたえられても、まえとおなじように出来事が成立している/というような事情がえがかれている。……はなし手はつきそい文のなかにその出来事の成立にとって不都合な、妨害的な状況を設定する。と

ころが、いいおわり文のなかにさしだされる出来事はこの状況に無関心に成立している。

.....
つきそい文にさしだされる出来事が原因としてはたらい、あたらしい出来事を成立させるはずなのであるが、そのあたらしい出来事を成立させずに、まえどおりの出来事が生じているとすれば、うらめ原因的な関係が成立してくる。¹⁾

と述べている。ところで、《条件的な判断》として「pナラバq」を想定していたとすれば、点線部は「 $\sim p$ ナラバ $\sim q$ 」を、実線部は「 $\sim p$ テモq」をそれぞれ表わしていると思われる。実線部の「 $\sim p$ テモq」は、点線部の「 $\sim p$ ナラバ $\sim q$ 」とは結果の異なる逆接の関係にあっても、想定文の「pナラバq」とは結果の同じである順接の関係にある²⁾。「 \sim ノニ」と「 \sim テモ」は、話者が前もって想定していた《条件的な判断》と違った結果になるところに逆接条件の読みが出てくるものである。しかし、構文論グループ(1986)における「 \sim テモ」は、《条件的な判断》と同じ結果として解釈されている。構文論グループ(1986:58)の次の叙述からも分かるように、構文論グループの「しても」は逆接条件ではなく、対比の順接条件と見るべきである。

つきそい文の述語が「しても」のかたちをとるつきそい・あわせ文は、うらめ原因的な関係というよりも、むしろ《ゆずり状況的な関係》を表現している。…はなし手は、あたらしい状況をつきそい文のなかに設定するにあたって、いいおわり文にさしだされる出来事の実現にとっては、より不都合なものに、あるいは反対に、より好都合なものに譲歩しているとすれば、そのあたらしい状況なるものは《ゆずり状況》ということになる。

構文論グループ(1986)の、「 \sim ノニ」と「 \sim テモ」の区別は、逆接確定条件と順接假定条件の別に他ならず、逆接確定条件としての「 \sim テモ」に関する分析は行われていない。

一方、戸村(1988)は、「 \sim ノニ」と「 \sim テモ」は前提とする条件文が異なっているとし、「 \sim ノニ」と「 \sim テモ」の論理関係を表わす式を次のように示している。

- | | | | | | | | | | |
|---------|---|---|-----|----------|---------|---|----------|-----|----------|
| (3) 条件文 | : | p | ならば | q | (4) 条件文 | : | $\sim p$ | ならば | $\sim q$ |
| 前提 | : | p | の時 | q | 前提 | : | $\sim p$ | の時 | $\sim q$ |
| S1ノニ S2 | : | p | の時 | $\sim q$ | S1テモ S2 | : | p | の時 | $\sim q$ |

戸村(1988:128-129)は、これらの「～ノニ」と「～テモ」について、

「S1ノニS2」は「pならばq」という条件文を真と前提として「pの時-q」が真となっているという前提とのズレを主張する文である。

「S1テモS2」では、S2で表される内容の実現に対して、S1（想定し得る阻害要件）が妨害の機能をもたないことが述べられているのである。これらのことから、「～テモ」の「モ」は「～モマタ同様ニ(also)」の意味を表す、いわゆる「取り立ての‘モ’」であると考えられる。

と述べている。(4)の場合、「～テモ」の後件と前提の後件が同じであり、戸村(1988)の言及している「～テモ」は順接仮定条件であることが分かる。「～テモ」に関するこのような見方は、言語学研究会・構文論グループ(1986)と同じであり、逆接条件とは関わりがない。

以上で見えてきたように、今日までの研究で、順接仮定条件としての「～テモ」を逆接用法と見なすことが多い。つまり、これらの研究は、逆接条件同士の「～ノニ」と「～テモ」の違いとは思われないのである。順接仮定条件「～テモ」は、想定文「pナラバq」に対する「～pテモq」であり、逆接確定条件「～ノニ」は、「pナラバq」に対する「pノニ～q」であることに、両方の違いが出てくるわけである。

3 逆接確定条件「～ノニ」と逆接仮定条件「～テモ」

今日までの、「～ノニ」と「～テモ」に関する研究は、逆接確定条件「～ノニ」と逆接仮定条件「～テモ」の違いに関する考察がほとんどであり、逆接確定条件と逆接仮定条件が区別されないことも多い。才田(1980)は、鈴木(1978)と同じく、「「ても」は状況的・例示的な意味あいを持っていて、「のに」は前後件の間に対照・対比・照応の関係がある」とし、アルフォンソ(1966)を引用している。以下、アルフォンソ(1966)を再引用し、それぞれの例を挙げておく。ただし、才田(1980)は、「～テモ」に対し例示的であるとしているものの、アルフォンソ(1966)における「～テモ」は、順接仮定条件ではなく、逆接確定条件または逆接仮定条件と見られる。

- (a) 「のに」は客観的対比を示す場合のみに用いられる。……「ても」は用法の範囲がより広く、後件が客観的事実を表す場合にも主観的表現の要素を含む場合にも用いられる。
- (b) 「のに」は現在又は過去の対比を示す場合に用いられ、未来や蓋然的な対比は示さない。……………

「ても」は「のに」よりも明確さに於て劣るので、何が起るか（あるいは起らないか）全く確信の持てない場合にも用いることが出来る。

- (c) 「ても」は通常、ある特定の時を表す表現と共に使われない。……「のに」には明確さという含蓄があるので、上記のような状況（→特定の時と共起する状況）にはぴったりと合う。

(a) *山は低いのに注意して登りなさい。

山は低くても注意して登りなさい。

(b) *走って行くのに間に合わないでしょう。

走って行っても間に合わないでしょう。

(c) *昨日買っても（もう）こわれている。

昨日買ったのに（もう）こわれている。

(b) の説明から、アルフォンソ(1966)は、「～ノニ」は確定条件を、「～テモ」は仮定条件と確定条件の両方を表わすものと見ていることが分かる。アルフォンソ(1966)の挙げている例(a)と例(b)は確定条件とは見られず、例(c)のみ確定条件であるが、(a)と(b)の「～ノニ」が不自然で、(c)の「～ノニ」が自然なのは、「～ノニ」が逆接の確定条件だからである。(a)は「山が低ければ注意を怠る」、(b)は「走って行けば間に合う」を想定している逆接の仮定条件であって、「～テモ」が用いられる。ところで、「～テモ」は、逆接仮定条件はもとより逆接確定条件にも用いられる言語形式であるが、(c)では、「～ノニ」は自然なのに、「～テモ」は不自然な文になってしまう。このことから、「～テモ」が逆接確定条件として使われる時には何かの制限があることが予想されるが、この逆接確定条件「～テモ」と「～ノニ」の相違に関しては、4節で考察することにする。

さて、才田(1980)は、アルフォンソ(1966)の(a)に関する考察を行なっているが、「命令形や意志形は主観的表現といわれている」として、「こうしたものは「～テモ」と共起するのが普通であるが、命令形も場合によっては「のに」と共起することがある」といい、次のような例を挙げている。

(5) a. 呼ばれないのに返事をするな。

b.*呼ばれなくても返事をするな。

(6) a.*呼ばれたのに返事をするな。

b. 呼ばれても返事をするな。

才田(1980;44-45)によると、(5)の前件と後件は「呼ばれないのだから、返事をしてはいけない」という順接の関係にあり、(6)の前件と後件は逆接の関係にあるが、逆接の場合「～ノニ」は非文法的な文を作るとされる。そして、その理由は、

「返事をする」ということは、「呼ばれる」という刺激に対する極めて自然な反応であると言える。(6)では、その自然な反応に対して「な」という禁止を表す終助詞が付いているから、前件と後件は逆接の関係を構成している。それにもかかわらず、(6)aが非文法的な文になるのは、禁止の「な」が、「呼ばれたら返事をする」ということ全体を禁止しているためであるからだと考えられる。つまり、(6)aで「のに」が結びつけているのは、「呼ばれる—返事をする」という順接の関係にあることがらであるということになるから、(6)aは非文法的な文になってしまうのである。それに対して(6)b「呼ばれても返事をするな」は適格な文である。これはもちろん、「ても」が順接関係にあることがらを結びつけるからではなくて、禁止の「な」が後件にだけ影響を及ぼしているからなのである。

と述べられている。確かに、才田(1980)の言う通り、(5)と(6)のような、否定命令や禁止を示す文では、「～ノニ」と「～テモ」が区別され、禁止の終助詞「な」が、

(5') a. [呼ばれないのに返事をする] な。

(6') b. 呼ばれても [返事をするな] 。

(5')a.のような「～ノニ」の場合には「呼ばれないのに返事をする」という文全体に、(6')b.のような「～テモ」の場合には「返事をする」という後件だけにかかっている。しかし、このことは、否定命令や禁止の終助詞「な」の問題というより、「～ノニ」文と「～テモ」文の構成要素から考えて当然のことである。つまり、「～ノニ」と「～テモ」はそれぞれ上の [] 中の要素で成り立っているのである。そこで、

(5'') a. [呼ばれないのに返事をする] 。

(6'') b. 呼ばれても [返事をしない] 。

において、(5")a.の場合は、「～ノニ」文に終助詞「な」を付けて禁止の意味にすることができる。ところが、(6")b.の場合は、「～テモ」の後件自体が否定されていなければ「～テモ」文は成り立たないのであって、(6")b.のように終助詞「な」が付いていてもこれは後件の要素に他ならない。

(5)a.は、「呼ばれなければ返事をしない」を想定していたにも関わらず、「呼ばれないのに返事をしてしまった」ことに対する否定命令である。一方、(6)b.は、「呼ばれれば返事をする」を想定しており、「呼ばれても返事をしなかった」ことに対する否定命令とはならないのである。よって、(5)a.は既知の事態を表わす逆接確定条件で、(6)b.は未知の逆接仮定条件だと言える。ただし、逆接仮定条件「～テモ」を「～ノニ」と置き換えるところから、「～ノニ」の不自然さが浮かび出てくる、つまり範囲の異なる「～テモ」と「～ノニ」を比べている、アルフォンソ(1966)の(a)と(b)や才田(1980)の(6)は、同じ意味構造を持つ異なる言語形式の考察にはならない。アルフォンソの(c)や才田の(5)のように、前件と後件に既知の事柄を持っていながら、「～ノニ」は自然で、「～テモ」は不自然になるような現象を考察することによって、逆接確定条件同士の相違が見い出されると思われる。

4 逆接確定条件「～ノニ」と逆接確定条件「～テモ」³⁾

「～ノニ」と「～テモ」の相違点を論ずる、今日までの研究の多くにおいて扱われている「～テモ」は、順接仮定条件または逆接仮定条件「～テモ」である。これらの「～テモ」と逆接確定条件「～ノニ」が比べられても、それぞれの意味構造が異なっているため、その表わす意味内容が異なってくるのは当然のことであろう。本節では、先のアルフォンソ(1966)の(c)の例のように、逆接確定条件という、同じ意味構造を持つにも関わらず、「～ノニ」と「～テモ」が互いに置き換えられないばかりか、どちらか片方が不自然になることがあるのはなぜなのか、について分析していきたい。

まず、「～ノニ」「～テモ」と副詞相当語句との関係を見るため、以下に、先のアルフォンソ(1966)の、(c)の説明とその例をもう一度記しておく。

- (c) 「ても」は通常、ある特定の時を表す表現と共に使われぬ。……「のに」には明確さという含蓄があるので、上記のような状況(→特定の時と共起する状況)にはぴったりと合う。

- ┌ *昨日買っても (もう) こわれている。
- └ 昨日買ったのに (もう) こわれている。

ただし、上の例の「昨日」の代わりに「明日」を入れるとすると、「～ノニ」も不自然になることから、ある特定の時を、過去の時と限定しなければならない。また、次の(7)のように、過去の特定の時と共起できる「～テモ」もあるが、この場合、「～ノニ」はその過去の特定の時と共起できない。

(7) 昔は、雪が降っても傘などささなかった、おぼえてますか？ (女(上))

(8) *昔は、雪が降ったのに傘などささなかった。

(7)の「～テモ」は、過去の特定の時と共起するのに対し、(8)の「～ノニ」は、過去の特定の時である「昔は」がなければ落ち着きがよくなる。(7)や(8)には、「昔」という過去の特定の時が表わされているにも関わらず、その結果はアルフォンソ(1966)と逆になっているわけである。ここで、過去の特定の時としての、「昨日」と「昔」を比べてみよう。「昨日買ったのに (もう) こわれている」における「昨日」は、短い期間を指しており、時間の幅がほとんど感じられない。一方、(7)の「昔」は、時間にある程度の幅のある一定期間を指している。このことから、「～ノニ」は、過去の特定の時のうち、時間の幅を持つ語句とは共起せず、「～テモ」は、ある程度の時間の幅を持つ語句と共起すると言えよう。ところで、このように、「～ノニ」が時間の幅を持つ語句と共起できないのは、「～ノニ」は、一回的な事柄を表わしているからであると思われる。これは、言語学研究会・構文論グループ(1986;52)が、「～ノニ」では、「つきそい文にさしだされる出来事もいいおわり文にさしだされる出来事も、ほとんどが一回きりの、具体的な動作・状態」であると述べていることから分かる。結論的に、「～ノニ」は時間の幅のない過去の特定の時と、「～テモ」は時間の幅のある過去の特定の時とそれぞれ共起していると言える。

さらに、「～ノニ」は、「いくら」とは共起しない。しかし、「～テモ」の場合、逆接仮定条件の時だけでなく逆接確定条件の時にも、「いくら」と共起する。例えば、「食べても食べても」のような反復型は、

(9) いくら食べても、太らなかつた [太らない]。

(10) *いくら食べたのに、太らなかつた [太らない]。

(9)のように言い替えることはできても、(10)のようには言い替えられない。「いくら p テモ」は「何度 p テモ」と大体同じであるが、これは、「～テモ」が反復的な事柄を前件に持つことができるということと関わっていると思われる。そのため、先の(7)の場合、「いくら」を入れることで、「～テモ」が反復的な事柄であることを強調することができる。

また、「～ノニ」は、「たとえ、もし」などとは共起しないが、これは、「～ノニ」が確定条件であるためである。そのため、「たとえ、もし」などは逆接確定条件「～テモ」とも共起しない。例えば、

(11) たとえ努力しても、成功しなかつた。

は、既知と異なる事態を前件に出しても既知と同じ結果になることを表わす反事実的テモ文として成り立つものであって、逆接確定条件としては成り立たないのである。

そして、「何、誰」のような不定語は、「～テモ」としか共起せず、

(12) 誰が何と言っても、彼は自分の決心を変えなかつた。

のような「～テモ」は「～ノニ」とは置き換えられない。

ところで、時を表わす語のない、例えば、先の鈴木(1978)の例の、

(1) 雪は夜になったのにやみませんでした。

(2) 雪は夜になつてもやみませんでした。

は、両方とも自然である。(1)と(2)は、意味構造は同じであっても、それぞれの解釈には微妙な違いがあると思われる。(1)の「～ノニ」は、前件「夜になる」が、夜というその時点だけを考え、時間の幅が感じられないが、(2)の「～テモ」は、夜になるまでの時間を考えており、時間の幅を読み取ることが出来る。これは、先も述べたように、「～ノニ」の前件には一回きり

の出来事が来るのに対し、「～テモ」の前件には繰り返し連続される、反復的な事柄が来るからである。

なお、逆接確定条件「～ノニ」で文を終えることはできても、逆接確定条件「～テモ」で文を終えることはできない。例えば、

- (13) (一生懸命に努力すれば成功する、を想定していて、現に努力をしたが、
成功しなかったとき) 一生懸命に努力したのに。

における「～ノニ」を、「～テモ」に置き換えることはできない。先の(1)と(2)は、「夜になれば、雪はやむ」を想定している文であり、(1)は、「夜になったのに」で文を終わらせて想定文通りに後件が成り立たなかったことに対する不満を表すことができるが、(2)は、「夜になっても」で文を終わらせることはできないのである。

5 おわりに

「～ノニ」は、逆接確定条件を表わす言語形式であり、「～テモ」は、逆接確定条件以外に逆接仮定条件、順接仮定条件に用いられる言語形式である。逆接確定条件「～ノニ」と、逆接仮定条件や順接仮定条件「～テモ」は、元々の意味構造が異なっており、これらの言語形式を同レベルで対比するわけにはいかない。同じ意味構造のものが異なる言語形式で現われている、逆接確定条件「～ノニ」と「～テモ」の相違点は、次のようにまとめられる。

- i. 「～ノニ」は時間の幅のない過去の特定の時と共起し、「～テモ」は時間の幅のある過去の特定の時と共起する。
- ii. 「～ノニ」の前件には一回きりの出来事が表わされ、「～テモ」の前件には繰り返し連続される反復的な事柄が表わされる。
- iii. 「～ノニ」は「いくら」「何、誰」と共起しないが、「～テモ」はそれらと共起する。
- iv. 「～ノニ」は後件が省略できるが、「～テモ」は後件が省略できない。

【注】

1.点線及び実線は、筆者によるものである。

2.坂原(1985;132)は、「 $\sim p$ でも q 」を、「 p でも $\sim q$ 」同様「 p ならば q 」の否定だとは見るものの、「この場合の否定は、条件文そのものではなく、条件文の誘導推論を否定している」としている。例えば、「 $\sim p$ でも q 」の(B)は、条件文(A)の誘導推論である(C)の否定だということである。ただし、誘導推論とは、「 p ならば q 」が「 $\sim p$ ならば $\sim q$ 」と推論するように誘いかける現象のことである。

(A) コーヒーを飲めば眠れなくなるぞ。

(B) コーヒーを飲まなくても眠れないさ。

(C) コーヒーを飲まなければ眠れる。

3.逆接確定条件を表わす「 \sim ノニ」と「 \sim テモ」は、同じ論理構造のものが別の言語形式として現われている例である。「 \sim ノニ」と「 \sim テモ」は、前もって想定していた順接仮定条件が成り立たず、想定文の前件は起こったが、その後件が起こらなかったことを表わすものであり、想定文の前件を p 、想定文の後件を $\sim q$ 、既知の前件を $F(p)$ 、既知の後件を $F(q)$ とした場合、「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$ 」と示される。

【参考文献】

- 安善柱(1997a) 「「テモ文」に関する一考察」 『日語日文学』 8 (大韓日語日文学会)
—— (1997b) 「逆接条件文に関する一考察」 『筑波応用言語学研究』 4
言語学研究会・構文論グループ(1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(4) — その
4・うらめ的なつきそい・あわせ文 —」 『教育国語』 84
小泉保(1987) 「譲歩文について」 『言語研究』 91
才田いずみ(1980) 「「のに」と「ても」」 『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』 3
坂原茂(1985) 『日常言語の推論』 東京大学出版会
—— (1993) 「条件文の語用論」 『日本語の条件表現』 くろしお出版
鈴木忍(1978) 『教師用日本語教育ハンドブック 3 文法 I 助詞の諸問題 1』 国際交流基金
田野村忠温(1991) 「「も」の一用法についての覚書 — 「君もしつこいな」という言い方の

位置付け— 『日本語学』 10

寺村秀夫(1981)『日本語教育指導参考書 5 日本語の文法(下)』国立国語研究所

戸村佳代(1988)「日本語における二つのタイプの譲歩文—「ノニ」と「テモ」—」『文芸言語
研究 言語編』 15

西原鈴子(1985)「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』 56

沼田善子(1986)「副詞句のとりたて—「と」「ば」「たら」「なら」と「も」—」『都大
論究』 23

前田直子(1993)「逆接条件文「～テモ」をめぐって」『日本語の条件表現』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

Alfonso, Anthony (1966) *Japanese Language Patterns : A Structural
Approach*, 2, Tokyo : Sophia University Press.